

はがき便り

腰越山麓からウニの化石

本五村で化石の新種発見

会員 小野盛雄

はじめにおことわり

このはがき便りは、前号の切直後(四月末)に届いたもので、編集者へ私信の形ですが、ふるさとの資料として得がたいもの、勿論本五村史にとり入れられるでしょう。すべて原文のまま。(羽柴)

拝啓

いへの間にやら花は散り、若葉の候となりました。すつかり御無沙汰致しまして申訳ありません。

史談誌第一一七号拝読、先生御執筆の「佩楯山」の化石について、ふと思ひ出したのは、数年前「本五村で化石の新種発見」とやらが新聞記事でした。たしか切り抜いた筈だとさがしつづけ、荏苒今日に至り、やっと見付けました。先生は既に御高承の事かと存じますが、記事の概要を左記致します。

昭和四十九年一月二十五日付、大分合同新聞「ウニの化石新種を発見」という見出しです。大分市植田中学校三年生小極誠二君は、同校野田雅之教諭(日本古生物学会員)の指導で、ウニの化石の研究を続けています。

小極君が中学一年の昭和四十七年冬、本五村腰越の山麓で見つけたウニの化石が、森下晶名古屋大理学部教授から、「調べた結果、新種に間違いない」と大鼓判を押され、昭和四十九年十月頃、学会に野田先生の手で発表し、「ワシタスナル・エロンガーツス・ノダアランドコヒ」の名で世界に認められる。

化石は、中生代白亜紀(約一億年から六千三百万年前)のものらしい。

以上です。

私ごとで恐縮ですが、二十年余り昔、及古のその海抜六〇〇米ほどの山道を下っている時、偶然足蹴りにした石が転り、二つに割れたので、取りあげて見ると、断面にブルミの化石が現われていました。いまでも数多くの鉱石類と共に持っています。(後略)

(あと書き)

このはがき便りには「新聞の切抜きには」いくらかの指摘を持ちたい。以下番号を( )けて問題点を明らかにしたい。

- 史が年月日について 昭和四十九年一月の新聞記事なら、学会発表はその前年四十八年十月ではなかっただか。あるいは新聞記事になつたのが五十年一月であつたか、そのどちらかである。
- 「腰越山麓」とあるのは「佩楯山麓上腰越」と考えられるが、化石採取の現場はどこであるのか。その現場によつてもつとしらべたい。
- 佩楯山の化石——それは本五村民に与えられて

いる命題で、古生代からの地質学・生物学等により多くの資料を提供してくれている。小野会員のはがき便りでは大分市の農村の一中学生の志をなさしめているが、この山は「ふるさと佐伯」の山。おが史談会として、もつと取り組んでよいのではあるまいか。

(羽柴 弘)